ここで紹介した内容は、ケーブルテレビCCNの岐阜商工会議所広報番組「ヒットの兆し」にて毎日放映します（1月）。是非ご覧ください。

岐阜発・日本発の世界初！
藍で、木を染める「Japan blue」の一枚板誕生！

日本の木の美しさを、岐阜から世界に伝えていきたい――。

銘木＋藍染

「銘木（めいぼく）」流通量日本一を誇る、岐阜県。その銘木を「木の国・岐阜の宝」だと、大切に育んできたヤマガタヤ産業㈱。
今回その銘木の一枚板に、日本の伝統工芸技術「藍染」が施され、世界初「japan blue」の一枚板が誕生しました。

大正七年、材木店として創業。以来九十六年間、木材一筋で実績を積み上げてきたヤマガタヤ産業㈱。住宅資材総合商社となった今も、「銘木（めいぼく）」への関わりには格別の想いで取り組みます。

木材のなかでも「銘木」と呼ばれるものは、樹齢の高い、木目の美しいものを指します。それらはまさに「King of Wood」とも呼ばれる程、希少価値や鑑賞価値のある、特別な存在なのです。

岐阜県は、数年前より「銘木の流通市場日本一」となりました。そこにはこんな理由があります。

「岐阜には原木から生産、加工、管理までの木材業全てに関わる職人が多く、市場が流通しやすいこと。また高齢化により、この市場は全国的に縮小傾向にあるなかで、岐阜は若い職人への承継が他の地域よりうまくいっていることがあると思います」

そう語る、社長の吉田芳治さん。自身も三代目であり、幼いころから木に囲まれ育ち、知らず知らずのうちに銘木の世界に魅せられていきました。

木の国・岐阜の「一枚板」を作り続ける

銘木とは…

「幾千年の時を超えて自然が生み出した〝至極の産物〟」だと表現する吉田さん。この美しさを伝え残し、また海外にも「日本の伝統の美しさ」として広めていきたいとの想いを抱き続けていました。そのなかで四年前から始めた「一枚板」の輸出。そこに取り入れているのが「日本伝統工芸技術とのコラボレーション」です。

以前から、日本古来の優れた技法の需要が減少傾向にあることを懸念していた吉田さんは、海外展開を進める際に、どちらの市場も活性化させる手段として、双方を融合させた様々な商品の開発に取り組んできました。

なかでも今、特に力を注ぐ技術が「藍染」。

「この藍色に、魅かれましてね」

吉田さんが虜になった藍色は、藍染の本場、徳島県の「阿波藍」。

その歴史は古く、平安時代にまで遡ります。当時から解毒、鎮静作用のある薬草として伝えられており、近年ではその抗炎、抗菌、抗酸化などの作用についての研究も進んでいます。藍の持つ天然素材ならではの美しさや風合いも相まって、各方面から注目の染料です。

ある時、徳島の取引先に出掛けた吉田さんは、そこで偶然、藍で染められた建材を使用して作られた展示空間に出会い、瞬時にその色や素材感が醸し出す独特な雰囲気に魅了されてしまいました。

「うちの一枚板を、この藍で染めることはできないだろうか」

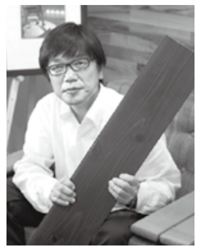
吉田さんが提案したのは、その展示空間を展開していた徳島県徳島市の大利木材㈱。ここでは、早くから徳島杉に藍染を取り入れたフローリングなどの建材の扱いに着手し、県内外で好調な売れ行きを続けています。

その染色作業に自ら取り組む、専務の小濱利郎さんも「阿波藍」に魅せられた一人です。

広重ブルーを超える「藍」を日本の誇る銘木に染め、海外へ匠の技とのコラボレーション

古くは「広重ブルー」と称され、あのゴッホやモネなどの世界的な画家を魅了した浮世絵の青。「その青よりあおし藍、それがジャパンブルー」だと、小濱さんは語ります。

「その世界を一枚板に…。私に、先人達を追い越し表現できるのか。とても大きな命題でしたが、是非やらせてほしいと即答しました」


大利木材㈱ 専務　小濱利郎さん

そして、幾度もの試行錯誤の末「銘木と藍とのコラボレーション」、珠玉の逸品「Japan blueの一枚板」が誕生しました。

…………………………

「人の寿命なんて短いものです。
銘木には100年以上、
1,000年を超えるものもたくさんあります。
その一本一本に、奥深く美しい年輪があり、
そこには、その時代に生きた人々の
歴史やドラマが刻まれているのです」

吉田さんの、この「銘木に馳せる想い」は、日本の色「藍色」に染まり、美しき「Japan blueの一枚板」として多くの海を渡る日が、近づきつつあります。

ヤマガタヤ産業㈱
〒501-6019 岐阜県羽島郡岐南町みやまち1-3
Tel.058-271-3111 Fax.058-271-3116
URL http://www.ymg-s.co.jp